

書評：「北の大地の開拓・農業・農業団体の 原点と軌跡を探る」（富田義昭氏 著）

農研機構 北海道農業研究センター 所長 な ら ぶ たかし
奈良部 孝

本書は、北海道における農業の発展とそれを支えた農業団体について、明治・大正期～昭和中期（S30年代）までの歴史を詳細に記録した力作である（A4版278頁）。今回紹介する第9編「馬鈴薯栽培および関連諸要素の変遷」（97-122頁）では、馬鈴しょ栽培を軸に、作付面積の推移、品種改良、病虫害対策、組織的な採種体系の確立など、多角的な視点からその発展の過程を描いている。

本編の特徴は、単なる歴史の羅列にとどまらず、農業技術や市場の変遷、社会経済的な影響までを網羅している点にある。たとえば、第一次世界大戦時の澱粉輸出の増加と、その後の戦後恐慌による生産の縮小、さらには第二次世界大戦における食糧難による馬鈴しょ需要の増大といった歴史の波が、作付面積や収量の変動と密接に結びついていることが詳述されている。ややもすると総花的になりがちなところ、具体的事例（留寿都村など）を深掘りするなどの工夫も凝らされている。

個人的には、馬鈴しょの病虫害との闘いや品種の変遷に興味を惹かれた。栽培開始当初から疫病やウイルス病による収量・品質低下に悩まされ続け、そのことが今日の健全種苗生産体系や殺虫・殺菌剤を用いた防除体系につながって行くことが読み取れた。また、今日まで栽培が続く「男爵薯」、一時代前の主力品種「紅丸」、歴史から消えて久しい「蝦

夷錦」といった品種がどのように誕生し、広まったのか、その背後にある技術的・社会的要因が豊富なデータとともに示されている。

さらに、北海道における農業団体の役割についても、本編は深く掘り下げている。農業試験場の設置や農業協同組合の発展、種いも供給のための組織的な採種体系の確立など、個々の農家の努力だけではなく、組織的な支援体制の確立が農業発展の鍵であったことが強調されている。馬鈴しょ関連業界に身を置く方であれば、自身や取引先等の組織のルーツとして押さえておきたい。

本編の価値は、その緻密なデータと実証的なアプローチにある。各時代の作付面積、収量、価格変動などの統計データが豊富に掲載され、さらに、各地に残される記念碑の紹介（写真付）など、単なる叙述ではなく、客観的な裏付けがなされた分析が展開されている。これにより、読者は北海道の農業発展を数値的にも理解することができる。

総じて、本編は、馬鈴しょという特定の作物を通じて、農業技術、市場経済、農業団体の役割を多角的に分析している点が評価できる。北海道の馬鈴しょ生産に関心のある人だけでなく、日本の農業発展に興味を持つ方にとっても、示唆に富んだ一冊である。
※本編は、日本いも類研究会HPのトップページ【出版物など】に掲載されています。